

5 希少野生動物の現状と課題

はじめに

埼玉県版レッドデータブックは、これまでに動物編を3冊（1996年、2002年、2008年）と植物編を3冊（1998年、2005年、2011年）刊行してきた。6～7年おきに1冊という、地方版レッドデータブックとしては比較的短い間隔で動物編と植物編をそれぞれ刊行してきたことは、県内の希少野生生物の生息状況の変化を的確に把握することに大きな役割を果たしてきたと評価できる。また、県内に生息する動植物全般に関する自然史情報の集積を推進する大きな原動力になってきたとも言える。

動物編レッドデータブックの4冊目となる本書を作成するにあたり、これまでの3冊の動物編に記述されてきた様々な希少動物の生息状況のおよそ20年間の変化の記録は、今回、あらためてレッドリストを作成する上での基本的な資料として有効に機能した。また、この間に集積されてきた豊富な自然史情報も、今回の3年間という調査期間を効率よく活用する上でたいへん重要な情報源となった。

こうして完成した本書全体からは、県内の希少野生動物の現状について様々な問題点が見えてくるが、『生息環境の悪化』や『生息地の減少』という根本的な問題については分野ごとの総論や各論でも厳しい現状がそれぞれの視点で述べられているので、ここでは少し視点を変えて、近年になって特に顕著な傾向がみられる移入種と希少種の関係について、見えてきた問題点を報告する。

移入種と希少種の関係性

まず、『移入種』という言葉の定義として、ここでは原産地が国外であるのか国内であるのかは問わず、また、県内での生息が確認されているそれらの個体（群）の由来についても、飼育個体の逸出も含めて意図的か非意図的な移入によるものなのかも区別せず、在来と考えられる種以外のすべての種、あるいは本来の分布域以外から持ち込まれた希少種の個体も含めてここでは『移入種』と表現する。

移入種と希少種の関係について、これまで作成された3冊の動物編レッドデータブックにはない、本書で初めて生じたケースがある。それは、前版のレッドリスト種のうち、爬虫類、魚類、クモ類で『国内移入』の可能性が示唆されて今回のレッドリストから外れた‘希少種’が出てきたことである。

爬虫類では、これまで県内のレッドランクが準絶滅危惧とされてきたクサガメとニホンヤモリの2種について、先行研究によって国内移入の可能性が示唆されたこともあって、今回のリストから外れた。魚類でも、これまで危急種とされてきたカワアナゴや情報不足とされてきたドンコなどが同様の理由でレッドリストから外れ、無脊椎動物でもクモ目のキシノウエトタテグモについては、「植栽土による随伴移入と本来の生息地の区別がつかない」という理由で、やはり今回

のリストから外れている。

本書のレッドリストに含まれる種でも、たとえば、バッタ目のクツワムシ（絶滅危惧Ⅰ類）やヒガシキリギリス（準絶滅危惧）などの‘著名な鳴く虫’の市街地域での記録が近年になって増加している原因について、バッタ目の総論ではこの地域への意図的移入の可能性を示唆しており、トンボ目では、愛好家と称される人物によって希少種のイトトンボが都市公園に意図的に移入された事例について言及している。

移入種と希少種の関係性については、これまでアライグマによる希少な両生類などの捕食や、肉食外来魚による在来魚類をはじめとする水生生物の捕食といった捕食 - 被食関係での影響や、エサ資源・生活空間をめぐる競合関係などが大きく問題視されてきた。しかし、今回のレッドデータブックの調査とそのとりまとめの作業では、そういった生態的な関係性とはまったく異なる「自然分布による生息記録か、人為的な行為が作用した分布記録か」という視点で希少種の生息情報を扱わざるを得ない事例にたびたび遭遇した。

レッドデータブックを作成するにあたり、レッドリスト種を選定する、あるいはレッドランクを決定するといった基本的な作業において、このような視点での移入種問題も顕在化しつつあることに言及しておきたい。

今後の課題

本書では、移入種による在来希少種への捕食圧や在来種との競合関係についていくつかの具体例を報告しているが、この3年間の現地調査において、希少種の分布調査を実施しながら、同時に移入種の生息状況や在来種への影響の調査をすることは困難を極めた。また、文献などで公表されている自然史情報には、移入種に関するもの、とりわけ移入種と在来種の関係に触れている情報が非常に少ないことも事実である。

生物多様性の保全を進めていく上での課題のひとつとして、動植物の移入種に関する状況の把握があげられる。今後は「希少種の生存を脅かす存在」として認識される移入種調査だけでなく、移入種自体の分布や生態に焦点を当てた調査も求められるようになるだろう。

これは、新たな移入種の侵入によって「これまでの普通種が希少種になりうる」可能性があることを危惧するためである。たとえば本書では、カマキリ目の総論で、現時点で県内の低地帯から台地・丘陵帯にかけて広い範囲に分布するレッドリスト非掲載のハラビロカマキリについて、他県での実例として近縁外来種のムネアカハラビロカマキリの侵入後にハラビロカマキリが激減した、という先行研究を紹介している。この大陸原産とされるムネアカハラビロカマキリが埼玉県でも2016年に確認されたことで、現時点ではレッドリストに含まれていない在来種ハラビロカマキリの減少が懸念されることを指摘している。

このような事例が移入種の影響として生じていることを考えると、本県の生物多様性保全の観点から、レッドデータブックの改訂作業と並行して、移入種に焦点を当てた調査の実施は、今後検討すべき課題であろう。